源氏物語夕顔殺人事件

古川薫

新潮社

源氏物語夕顔殺人事件

古川薫

新潮社

源氏物語夕顔殺人事件
昭和五十八年三月十一日印刷
昭和五十八年三月十五日発行
著者　古川薫
発行者　佐藤亮一
発行所　株式会社新潮社
東京都新宿区矢来町七一
郵便番号一六二
電話　業務〇三(266)五一一一
　　編集〇三(266)五四一一
振替東京四—八〇八
印刷　株式会社三秀舎
製本　植木製本株式会社
定価　九五〇円

© Kaoru Furukawa 1983　Printed in Japan

乱丁・落丁本は、御面倒ですが小社通信係宛御送付下さい。送料小社負担にてお取替えいたします。

目次

源氏物語夕顔殺人事件 5
英艦バロサ号水兵の殺人 105
享和三年、虚ろ舟飛来す 167

装画　木村光佑

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

源氏物語夕顔殺人事件

源氏物語夕顔殺人事件

1

火曜日の図書館は、午前中ほとんど入館者がいなくて、二階の閲覧室は寒々としていた。佐野健二郎は、丸っこい不器用な指先で索引カードをさぐり、「国文学大系」の中の『源氏物語』の項をやっと見つけ出した。これは五巻に別れており「夕顔」の巻は、第一巻に載っていることを知る。次に書名・記号などを所定の用紙に書き入れる。下の欄に住所・氏名、それから勤務先のところに「無職」とだけ記入したのは、今勤めている家庭電器関係の商社を、いずれ辞めることになるかもしれぬという意識が、心底に動いていたせいもある。

健二郎がその閲覧票をカウンターに差し出すと、中年の女性館員は黙ってそれを引き寄せ、白粉気のない顔を伏せて丹念にあらためてから、チラリと目を上げた。何か尋ねられるのかと、彼はわけもなく身構えたが、そのまま女は書庫の奥に姿を消した。

そんなに待たされるでもなく、運ばれてきた部厚く黴臭い書物を手に、健二郎は楠の大樹の枝がガラスに触れるばかりに覗いた窓際の机を選び、パイプ椅子をひいて、おもむろに大柄な体を預けた。

（今さら図書館で源氏物語を読むなど、まったく考えもしなかったな）

と、彼自身苦笑まじりに胸の中で呟くのだが、さきほどの館員もふと好奇心をそそられたのか、無表情を装いながら、じっとこっちを見ている。するとその視線を藉りたかのように、自分がこれから始めようとしていることが、健二郎には、しらじらしいひとつの風景として感じられるのだった。何をたぐり出そうとしているのかは、すでにわかっていた。強いてそれを確めようとする行為への漠然とした不安が、揺らめいている。

「夕顔」の巻を開いたが、すぐには読む気になれず、窓に目をやった。葉裏に透けた初秋の光を、やわらかく館内にこぼれさせて、楠の枝は窓の半分ほども塞ぐように繁っている。それでまた健二郎は、ほの暗いあの西洋館の森や、地下室に転落して死体となった津也子のいまわしい姿——警察で調べられたとき、刑事がほんのちょっとだが写真を見せてくれたのだ——を思いうかべた。

廃屋となった西洋館の庭で薪能が催されてから、まだ一カ月も経っていないのに、まるで遠い以前に見た悪夢を反芻するように、当時のもようを、健二郎は甦らせた。

まず九月に入って間もなくのころ、彼の身辺で少しばかり気になることがあった。差出人不明の郵便物を受け取ったのである。それが事件の発端、といえるものだった。

2

その日、朝からだらだらと長びいた営業会議が終り、自席に戻ってきた健二郎は、莨を銜えたまま、事務机の上に重ねられた書簡類の中の一通を、汗ばんだ手に取り上げた。他のダイレクト

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

メールなどと共に、半日近くも置きっ放しにしていたものである。
薄っぺらなハトロン紙封筒には、乱暴な字で宛名書きがしてあり、裏を返すと差出人の記入がないのだった。開いてみる。中には観能会の会員券が一枚、無造作に突っ込んであるだけだ。
首をかしげながら、能面の絵をあしらったそれを眺めていたが、別にこれといって送り主の心あたりもない。半券との境に朱肉を使った割印が押してあるところを見ると、これはチラシではなく、買い取ったのをわざわざ送ってきたとしか思えない。
(私信と解すべきか)
健二郎は、まずそのことを考えた。印刷で示された会費は五千円である。
(小売業者からの賄賂じみた贈り物なら突き返してやらなければ……)
ふいに心を昂らせたが、まさかと思いなおした。第一、健二郎にはまるで関心のない行事である。この地方ではめずらしい薪能が催されるという新聞記事を読んだ記憶はあったが、こんなものを貰ったところでちっとも嬉しくはないのである。ただ五千円ほどの価値がある会員券だとすれば、このまま屑籠に捨ててしまうには惜しい気もした。
(津也子だろうか)
と、彼は思った。一カ月近く会っていない。悪戯っぽくもあるが、やや意地悪さを感じさせる方法で誘いをかけてきた愛人の気持を、それとなく推し測りながら、電話してみたのである。
「まさか、君が送ってくれたわけではないだろうね」
「あなたが能楽などに興味を持っていらっしゃらないのは知ってますし、それに郵送したりする

必要もないじゃありませんか」
あとは健二郎の足が遠のいたことに、冗談まじりの嫌味を並べるといったことである。
「そのうちにね」
ほどほどに電話を切り、ようやく落ちつかない気持で、もう一度その会員券をあらためた。やはりこれといって思いあたることもなく、その日、健二郎は帰宅すると、妻の蕗子に、封筒のままそれを渡して見せた。
「差出人の名を記入するのを忘れたのじゃないかしら」
「このごろの五千円だとはいえ、安くもない入場料だ。よほどの慌て者でない限り、自分の名を書き忘れることはあるまい。それに手紙の一行もないというのは変だ」
「そういえばそうだけど、もったいないから行ってらっしゃいよ。その薪能は評判になって、会員券が売り切れ、入手できずに残念がってる人もいるそうですから」
「では君が行けばいい。そう思って持って帰ったのだ。僕はまったくの門外漢だからな」
「でもあなた宛に送られてきたのでしょう。わたしが出かけるわけにはいかないわ。たまには伝統芸能の空気にふれておくのも悪くないわよ。薪能で『夕顔』を観るのもいいじゃない」
蕗子は、大学の国文科で中古文学を専攻しており、源氏物語などについては、むろん法科出の健二郎よりはるかに詳しい。能の『夕顔』はまだ観ていないが、『葵上』は、先代の金剛巌が演じる本物を前に観たことがあるとも言った。
「とにかくその会員券、無駄にするのは惜しいわね」

健二郎の帰宅が遅かったり、夜ひとりで出かけると、不機嫌な顔をするくせに、めずらしくそんなことを言うのは、やはり五千円の会費に関係があるらしいと健二郎は思った。

（女は欲張りだからな）

と、内心嗤って、

「では、折角の機会だから行ってみようか。これを送ってくれた人にも会えるだろう。礼も言わなくちゃあな」

へたな言い訳じみた、そんなことを健二郎が言うのは、会が終ったらその足で津也子のアパートを訪ねてやろうと、咄嗟に計画をめぐらしたからである。

このごろ蕗子の嫉妬がひどくなり、足が遠のいている。それも実に陰湿で、口に出して責めるといったものではない。女の第六感というのか、健二郎が津也子と会ったことを敏感に嗅ぎつけると、一週間でも十日でも無言の行がつづく。子供のいない夫婦だけの生活で、妻がとるそうした態度が、家庭を荒んだ雰囲気に包みこんでゆくことを、蕗子自身ねらっているようにもみえる。健二郎には、それが堪らないのだが、そうかといって津也子との多分に煮え切らない関係を整理するでもない、ここ二年ばかりをすごしているのだった。

3

当日は、日曜日である。健二郎は午後四時に家を出ようとした。休みの日は、車を使わないこ

とにしている。特にきょうのような外出は、帰宅時間を誤魔化すためにも、歩いたりバスに乗ったりのほうが、好都合だと、ひそかに計算しているのだ。

(帰りに一杯やってくると言っておいたほうがよいかな)

そんなことを思いながら靴を履いている健二郎の背中に、蕗子が話しかける。

「五時半の開演でしょう。少し早すぎるんじゃなくて」

心を覗かれた気がして、健二郎は狼狽を隠すように腕時計を見た。

「開場は四時半だろう。場所が風変りな西洋館の庭ということだから、明るいうちに見物したいのだよ」

「終ったらすぐ帰るのでしょう」

「知った人に誘われたら、街に出かけることになるかもしれない」

「そう」

信用していないふうだ。もともと痩せぎすの蕗子は、三十を過ぎてから面長の顔に大きな目や高い鼻筋ばかりが目立ち、本人が気にするうちに目尻にも皺が刻まれて、険しい表情が滲み出るようになった。それは年齢のせいばかりではないだろう。健二郎にも一半の責任はあるというものだ。

その彼ときたら、三十五歳の男ざかりで、学生時代スポーツをやっていただけに、骨格もたくましく、背広を着た野球選手のように見えた。ちょっと腫れぼったい瞼をしているが、色浅黒く口もとが引き締まって、苦み走った男などとお世辞半分に飲み屋ではちやほやされるほうだ。夫

婦の間に子供ができないせいか、どことなく独身気分が抜けきれず、一時は若い社員たちと夜の街を飲み歩く行状も多かった。かといって放蕩の限りを尽すというのではもちろんない。どちらかといえば見かけほどもなく気は小さいから、津也子とのことが蕗子に感づかれると、おどおどとその顔色を窺いながら、挙措動作を慎重に配慮するようなところもある。

ついこの前、係長に昇進してからは、職場での保身と、夫婦関係の安静を願って、健二郎はいつの間にか落ち着いた生活を求める中年サラリーマンの、つましい体質を深めつつあった。酒もいくらかは控え目に、津也子のアパートに通う足も次第にとぎれがちになっているが、さりとて身辺の一切を整理しようという強い意志力が働くでもない。多分に曖昧な部分をただよわせながらも、会社勤めだけは細心に励んでいる——。

町の高台にある健二郎の家から、薪能が催される会場まで、バスなどを利用しておよそ三十分かかった。昔は家老屋敷だったという家の長い土塀のつづく並木道に面して、その西洋館は花崗岩の大きな門柱を構えている。門内はほの暗い樹林になっていて、建物や庭はすぐには見えないのだった。

ここにある西洋館は、第一次大戦当時、欧州航路の貨物船で巨万の富をなした人が建てた豪邸である。イギリス十七世紀ごろの豪農の家を模した煉瓦造りだが、外形ができあがり、内装にとりかかろうとするころ世界恐慌に見舞われて倒産してしまった。結局、人は住まないままである。

旧藩時代は十万石の城下だった町のはずれに、いかにも取り残されたという感じの、わずかな茂みを見せる森の中に、その廃屋はあった。半世紀も以前から立ち腐れとなった赤煉瓦の建物と、

二千坪を越える荒れた庭園が、今ではまったく浮世離れした場所になっている。

広い敷地に魅力があったのか、さる大手企業が買い取ったが、これといって利用するでもなく放置されている。付近に住む無名の作家が、この廃屋に興味を抱いて『森と西洋館』という小説を書いて発表したのが、建物と一緒に少しは知られるようになり、遠くから見物にくる人々もいた。

健二郎は、やや色づきかけた楓の葉を左右にながめながら、ゆるいカーブをえがいて奥に通ずる真砂土の道を、のろのろした足どりで歩いた。そして樹間を透かして、富豪の浪費の名残りを示す問題の建物の一部を見たのである。その湿りを帯びた赤煉瓦の肌は、木立に抱かれてひっそりと眠っているようだった。

開場の時間にはなっているのに、まだ受付けの準備ができておらず、忙しそうに立ち働いていた初老の男が、迷惑そうに一番乗りの健二郎が差し出した会員券の端をちぎり取って、中に入れてくれた。

健二郎は西洋館を半周し、なお鮮やかな色をとどめた煉瓦の外壁を、しげしげとながめた。ところどころ蔦が覆っている。赤煉瓦のアーチを支えた石の円柱が並ぶ回廊にのぼって、朽ちたまま半開きになった入口の扉の間から身を乗り出して内部を覗くと、鉄骨を渡した床の骨組みがあって、その下に地下室の闇が無気味によどんでいた。壁に長方形の穴があいているのは、マントルピースになるべき個所であろう。

「危険ですから、建物には近づかないでください」

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com